

日本で2つめのロータリークラブを大阪に創設し、初代会長として活躍。
戦後は第60区2代目ガバナーとして、日本におけるロータリーの発展に力を尽くした。



第2660地区

星野 行則(大阪RC)

Hoshino Yukinori

1870年生 1960年没

1922入会 [商業銀行]

会長年度 1922-1924 G年度 1951-52

大阪RCの創設者にして、 第60区2代目ガバナー

大阪RCは、日本における2つ目のロータリークラブとして1922年11月に誕生した。その創設にあたり、後に大臣となる平生鈇三郎氏、小林一三氏、村田省蔵氏をはじめ当時の大阪を代表する人物をチャーターメンバーとして集めるなど、中心となって尽力したのが星野行則氏であり、設立後は、初代会長となって、キリスト教精神のもと、その発展に寄与した。

また、戦後は、RIへの復帰後1951年7月に、第60区2代目にして最後のガバナーに就任。82歳の高齢ながら単身渡米し、レイクプラシッドでのインターナショナルアッセンブリーと、アトランティックシティでの国際大会に参加した。さらに、ガバナー研修を終えて帰国すると、北海道から鹿児島まで60以上のクラブを公式訪問するとともに、11クラブの設立に尽力するなど、熱意をもって精力的に活動。1年間の任期を終えた後も、1960年5月、89歳の天寿を全うするまで、「感謝」「進歩」「自己犠牲」からなる人生観と、社会連帯感を持って、世のため人の

ため社会のために尽くした。

神学校で学び、米国留学を経て キリスト教主義の実業家に

星野氏は、1870年8月、備前島原藩の家老の家に生まれた。ほどなくして実施された廃藩置県により、生家は禄を失い生活が困窮。星野氏は小学校を卒業すると、長崎に出て医者の子供となった。

向学心にあふれた若き星野氏は、余暇を利用して宣教師から英語を学ぶ一方、多くの書物を読み、福沢諭吉や新島襄らの新しい思想や精神にも盛んに触れた。なかでも深く傾倒したのがキリスト教主義精神だった。キリスト教の教師として世に立とうとの志を抱き大阪に出ると、川口居留地の大阪三一神学校で学んだ。

転機となったのは、大岡須磨子さんとの結婚だった。須磨子夫人は長崎師範学校を卒業した賢婦人で、結婚後は大阪の女学校の舎監として働き、「立派なキリスト教主義の実業家となって、国家社会に尽くしたい」と考えるようになっていた星野氏を物心両面から支え、アメリカ留学を後押しした。さらに、大阪の両替商加賀屋の広岡浅子氏がその女学校に通う一人娘を通して須磨子夫人と出会い、気に入ったことが、星野の実業界入りの機縁ともなった。

1897年、帰国した星野氏は加賀屋に入り加島銀行設立に関わると、東京支配人、本店専務理事などを歴任。大同生命でも監査役や常務取締役を務めるなど、かつて宗教家を志した崇高な人格と進歩的な考え方、10年20年先を見透かす先見の明で、老舗両替商から近代的な企業への変革を支えた。

日本経済の近代化・合理化と、 青少年育成にも尽力

対外活動にも積極的だった。1911年、アメリカの経営学者F. W. テーラー氏が著作「The Principles of

Scientific Management」を発表すると、留学経験を活かして早速翻訳し、1913年に「学理的事業管理法」と題して出版。日本に科学的管理法を紹介し、経済の合理化、近代化、能率化に多大なる影響を与えた。

また、能率向上の為から仮名文字使用を推奨する「カナモジカイ」の会長を35年間にわたって務め、渡米して仮名文字のタイプライターの開発に取り組むなど、国語・国字改良の問題に熱心に取り組んだ。

青少年の健全育成にも関心が高かった。大阪YMCAの理事長を創成期から10年間務め、発展の土台を築く一方、財団法人育英一心社を設立し、志高く優秀な若者の就学を援助した。



「ロータリーの発展と使命」掲載の星野氏(中央)

あだ名は「ボン」

設立当初、アメリカに倣い、会員同士ニックネームで呼び合っていた大阪RCにおける星野氏の愛称は「ボン」。現役時代には、頭を下げて挨拶をする部下にのけぞって応えたという逸話のある星野氏だけに、気難しい面もあったのだろう。

しかし、その本質は、情に厚く心温かな情熱家であり、前述の財団法人育英一心舎も、短期間に愛妻と愛息を失った親友に寄り添い、その想いを汲んでの活動だった。また、毎年12月25日には、林市蔵氏(元大阪府知事)と共に大阪南の釜ヶ崎を訪ね、経済的困窮者にたくさんの金品を贈ったとの逸話も残る。ブライトホルツ会長が提唱する「奉仕を持って善意を行動に移すこと」を体現した、真のロータリアンであった。

文責:ロータリー日本100年史編纂委員会